

責任

長野県諏訪清陵高等学校附属中学校 3年 宮坂 亮慶

私は昨年度学校で行われた「深い学び実践講座」で水耕栽培について興味を持ち、実際に装置を作りました。学習を始めるにあたり SDGs(持続可能な開発目標)の十二番目の目標「つくる責任 つかう責任」にならい『「つくる責任 そだてる責任」を学ぶ』という目標を立てて学習を始めました。水耕栽培とは何かを調べる中で、作物の栽培に適していない地域や食糧難に瀕している地域で水耕栽培が利用できるのではないかと考えました。

水耕栽培は天候に左右されずに一年中作物を栽培することができ、また、その土地に水だけあれば作物を栽培できるからです。しかし、追究、実験を重ねていく中でそれは難しいと感じ始めました。そのような地域の大半は発展途上国であり、水耕栽培の装置を導入したとしても、それを維持していくことが難しいと思ったからです。私たちが作った装置は比較的単純ですが、電気、養液そして大量の水を必要としています。しかし、発展途上国などではきれいな水が十分に手に入らなかったり電気が供給されてなかったりと様々な問題があります。また、規模が大きくなっていくほど構造が複雑になり、限られた人しか使うことができないという問題が出てきます。

この学習を通して、水耕栽培はたしかに食料をどこでも一年中栽培できるという点においては、現在の食糧問題を解決する上で有効な手段であるとわかりました。それと同時に私はその「どこでも」が限られた先進国などの裕福な国であるということも学びました。先進国のなんでも手に入るあたりまえが違う国では困難なことであるということ私達は認識すべきだと考えます。私たちが「有効である」と勝手に決めつけ他の国に寄付、設置をしたとしても相手国に合わなければそれは相手側にとってはただの「もの」です。そのただの「もの」をどのようにして、欠かせない「もの」にしていくかが大切な事だと考えました。

この経験を通して私は、便利な装置を提供する側はそれをつくった責任を、種を植えた人は最後までそだてる責任をそれぞれが意識していくことが大切だと思いました。装置をつくった人は、その装置が最後まで有効に使えるように、そして現地の人、土地に合ったものにするという責任を負い、また、作物をそだてる人は最後までその作物をそだて、それまでに使用した資源等を無駄にしないという責任を負うと考えました。

これから私は他にも自分が負っている、負うかもしれない責任を考えながら、そしてその責任に対してどのような思いで取り組めばよいか意識しながら生活していきたいです。